文法（史的研究―近代）

鈴木丹士郎

一

中世後期（室町時代）から近世までの文法についての研究をとりあげる。しかし、必要に応じてこの時代とつながる前後の時代のもの、音韻や語彙、文章・文体の分野との関連においてなされた文法事象の考察についても見てゆくことにする。考察の対象・内容が類似のものはまとめる方向につとめたが、同種類の資料についてはそのジャンル内で問題点別に扱うこともした。

二

まず動詞については、ハ行・ワ行の下二段活用がヤ行の活用に変化するとともに逆にヤ行の下二段動詞がワ行下二段の活用のように変化することが中世に行なわれたが、このような現象について考察を加えたのが出雲朝子「中世における文語ア・ハ・ワ行下二段活用に属する動詞のヤ行下二段化現象について」（『中田祝夫博士功績記念国語学論集』、勉誠社、昭54・2：以下この論集所収の論文を取上げる場合は、『中田論集』と略称する）である。これは十一種の抄物を調査した結果、ヤ行下二段化は語幹が一音節の動詞に顕著であること、鎌倉時代にヤ行動詞のア・ハ行化が見られるのに対し、室町時代には逆にア・ハ・ワ行動詞のヤ行化が見られることを明らかにし、さらにヤ行化現象は下二段の一段化現象と同時期に生起するもので、この二つの変化に共通する要因として長音化回避による語幹部の保持のためであるとの指摘をする。ヤ行化を一段化現象と関連づけて立論されたするどい考察である。ただ、長音化回避のほかに、要因として「出合ふ」を deyǒ（天草版平家物語）とするような一種の連声現象の影響も考えられるのではなかろうか。ヤ行化下二段形を規範的な話しことばとするが、本来からのヤ行下二段形の性格はどうとらえたらよいのだろうか。また、この論を基にして考えると、近世の文語に少くないヤ行化下二段が、中世の口語（下二段）が近世では文語として受継がれたものでなく、口語の下一段形から反省的につくられた文語形である可能性が考えられるように思われる。なお、所収論集34頁中のア段音のもの四四語は四三語、ウ段音のもの五語は六語か。さらに氏にはこの論文とつながりをもつ「鎌倉時代における文語ア・ハ・ワ行下二段活用動詞とヤ行下二段活用動詞の活用の混乱について」（『青山学院女子短期大学紀要』33、昭54・11）がある。

次に動詞の連用形と音便形についての考察としては①高見三郎

「『杜詩続翠抄』の音便形」（『論集日本文学・日本語3　中世』、角川書店、昭53・6）、②蜂谷清人「室町末ハ行四段動詞連用形の音便――狂言・説経・幸若舞を中心に――」（『国語学研究』18、昭53・12）、③松井利彦「ハ行四段動詞の音便――近世漢文訓読における――」（『論集日本文学・日本語4　近世近代』、角川書店、昭53・7）などがある。①はハ行四段動詞のウ音便・促音便化、ラ行四段動詞の促音便化、サ行四段動詞のイ音便に形容詞のウ音便・イ音便化などの音便化率の様相から「杜詩続翠抄」の言語的性格を他の抄物との詳細な比較検討のもとにその成立時期（永享九年～一二年）を推定したもの。言語内部の徴証から奥書に見る成立時期を裏付けている。②は従来から好個の問題としてよく取上げられるハ行四段動詞のウ音便と促音便について今までの成果をふまえ、さらに資料・文体・場面等を考慮に入れ、かつ残された問題をも提示したきめこまかな考察である。促音便化しやすい傾向にある語はその語音構造が-ai-（従ひ、向ひ）をとるものに多く、書きことばや格式ばった場合に促音便が現われやすいことを明らかにしているが、氏も触れているように、同じ促音便でも書きことばのものと東国方言のものとの関係については今後さらに考究しなければならない課題として残されている。③は近世の漢文訓読におけるハ行四段動詞の音便形使用の状況を調査し、学派によりまた個人によってウ音便形と促音便形との現われ方に違いが見られること、すなわち訓点は、(ア)語幹が一音節の語はウ音便（「言ふ」だけは促音便）が用いられるが、語幹が二音節以上の語は促音便が用いられるもの、(イ)一音節語幹は(ア)と同じであるが、二音節以上の語幹の語には促音便とウ音便が混用されるもの、(ウ)原則としてウ音便が用いられるものに分類されるとする。さらに促音便が現われやすいのは語幹末がア段のものであるという指摘は②での指摘と符合する。近世の文語における音便形使用の状態が次第に明らかになってきたが、文語のウ音便形は口語における場合とどうつながるのか、また文語においても異種の文体における音便形（非音便形も含めて）の実態が明らかにされなければならない。夙に指摘された馬琴の音便形の用い方（橋本四郎「里見八犬伝の文体とその文語」『国語国文』、昭31・11）も漢文訓読との関連から見るとどう位置づけられるのか考えてみたくなる。

三

敬語（待遇表現）については狂言を対象とした考察に①小島俊夫「虎明本狂言集の敬語体系――対称代名詞の構成する主述対応」（『中田論集』、昭54・2）、②坂口至「大蔵流狂言の待遇表現について――述部の体系――」（『語文研究』46、昭53・12）がある。①は虎明狂言本の敬語体系について対称名詞による主語述語の対応する形式から「話し手が、いかなる話し相手に対して、いかなる社会的・心理的制約のもとに、いかなる言語記号群のなかから、いかなる言語記号をえらんで、いかなる敬意を社会習慣として通達しうるか」という観点から考察し、待遇価値の度合は大きく四段階（細分すると六段階）に分けられるとする。同じ大蔵流狂言の敬語（待遇表現）を取上げたのが②である。これは述部形式から分類すると三段階に分けられるとする。従来の、代名詞と述部形式の呼応、あるいは代名詞だけからという観点をとらず、もっぱら述部形式から考察するという方法は斬新であり、社会関係を親族的身分関係と社会的身分関係に分けた上の考究も妥当と思われる。今後各述部形式の個々の用法の考察

が望まれる。

次に江戸時代後期の上方語については継続して精力的に研究を進めている寺島浩子氏に「近世後期上方語の待遇表現 ――『命令表現』(勧誘・禁止表現) ――」(『論集日本文学・日本語4 近世近代』、角川書店、昭53・7)がある。これは洒落本を対象とし、江戸語と比較しながら勧誘・禁止表現の上方語の特徴を見ようとしたもの。間接的表現はその含む範囲がかなり多様で形態面での共通項が見出しにくく、なお問題が残る。なお氏にはほかに「近世後期上方語の待遇表現――人称代名詞について、その一」(『橘女子大学研究紀要』5、昭53・2)もある。彦坂佳宣「洒落本類からみた近世後期尾張方言の待遇表現体系」(『国語学』116、昭54・3)も同じく洒落本を対象にし、対称代名詞と述部形式から尾張方言の待遇表現体系について論じ、一般庶民と遊女との間に基本的枠では差のないことを明らかにしている。この特色が上方語、江戸語ともかなり異なるとするが、具体的により鮮明にしてほしかった。なお「なされる」と「なさる」は位相差をはっきり示すものであれば、述部形式一覧(表Ⅱ)では「なされる」でまとめず、別々に立てて示す方がよいと思われる。また、矢野準「近世後期京坂語資料としての滑稽本類 ――尊敬表現を中心に――」(『国文研究〈静岡女子大学〉』12、昭54・3)は近世後期の上方語の資料として滑稽本を取上げ、上方板と江戸板(作者が江戸)の区別をし、作品の内容をこまかく検討する。この期の上方語の実態を明らかにするために拠るべき文献の吟味は欠くべからざることであるが、氏はこの点に実に慎重な態度で臨み、文献資料の質の精度を高める配慮が一貫して十分にうかがうことができる。作品別の尊敬表現一覧表も有用である。土屋信一「遊子方言の客人『平』の言葉」(『中田論集』、昭54・2)は洒落本「遊子方言」に登場する「平」なる人物を、使用する言葉の特徴から武士・通人であるが、それに限られるものでないとする。論旨は明快であるが、教養ある階層の人々には町人・武士を問わず共通する言語の使用が見られ、また上方語とも共通する点があり、なお人物を特定するにはむずかしさが残る。後半からの江戸語が発達する過程において東京共通語に通ずる要素の摘出はなかなか重要である。また、自称代名詞「丸(まろ・まる)」の消長と用法の変化を詳細に跡づけたものに森野宗明「中世・近世における自称代名詞『丸(まろ・まる)』について」(『中田論集』、昭54・2)がある。

次に「言ふ」の敬語「おしなる」「おすなる」「おしゃる」の語性やその成立を論じたものに③高見三郎「『漢書列伝抄』のオシナル・オセラルル」(『山辺道』23、昭54・3)、④来田隆「敬語『おすなる』と洞門抄物」(『福岡教育大学紀要』27、昭53・2)、⑤大塚光信「オシャル」(『叙説〈奈良女子大学国語国文学研究室〉』、昭54・10)などがある。③は「漢書列伝抄」(竺桃抄、綿景抄、景徐抄の三抄)に見られる「おしなる」「おせらるる」の敬語の度合に差のあること、「おしなる」の敬度が逓減する傾向にあること、「おしなる」が、「おうせなる」の変化形「おせなる」から変化してできた語であることなどについて述べたもの。一方、④は「おすなる」が江戸時代の東国語系抄物である曹洞宗系(洞門)のカナ抄のうち万安英種の手に成るものに見られること、「おしゃる」を用いない万安の抄は洞門抄物のなかでも異なった性格をもつことなどに言及している。⑤は「おしゃる」の成立について論じたもので、説得力のある論述で「おしゃる」は「仰せらるる」の変化した形ではなく、「お

-ハ動詞連用形ソ-ある」が「お-ハ動詞連用形ソ-やる」の変化と並行して、「仰ある」から変化して成立したものと推定している。

ところで抄物についての研究は依然として活潑であり、関西系の資料についての研究のうち文法関係だけを見ても盛況である。また東国系抄物の研究も一層拡充し、成果をあげているように思われる。田籠博「東国抄物の敬語」（『春日和男教授退官記念語文論叢』、桜楓社、昭53・11：以下、『春日論叢』と略称）は浄土宗系抄物である円応のものは禅語録抄であり、洞門抄物と共通する言語特徴が見られるというのはいわば当然かとも考えられるが、なお後考に期待したい。敬語ではないが、抄物の助動詞を扱ったものに⑥樋渡登「洞門抄物における助動詞ョウについて」（『国学院雑誌』、昭53・9）、⑦金田弘「助動詞ベイと洞門抄物」（『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』、桜楓社、昭54・8：以下、『田辺論叢』と略称）がある。⑥は助動詞「よう」が江戸末期の抄物から多く認められることを指摘する。資料の個別的性格をよく吟味した着実な論考である。⑦は洞門抄物に見られる「べい」が教養ある層に行なわれ、東国共通語のような性格をもっていたとするが、「雑兵物語」や「清十郎追善奴俳諧」などの「べい」も同様に考えていいのか、また「だんべい」など撥音化形はなまの口語ということになるのであろうか。

四

助動詞についても多くの論考が見られる。実証的で堅実なものが多いなかにあって、問題意識に欠けたり、単に現象面の平面的な記述に終っているものもままあることは惜しまれる。このような傾向は助詞の場合にも当てはめて言いうることである。

小林賢次「中世の仮定表現に関する一考察――ナラバの発達をめぐって」（『中田論集』、昭54・2）は仮定表現の「ならば」の発達について言及したもの。非完了仮定の用法をになう「ならば」が次第に完了性仮定（未来の時点において動作や作用が完了した場合を仮定する）の用法も生じたが、完了性仮定の「たらば」の発達で新たに生まれた用法の方が衰えるとともに本来の非完了性仮定の用法に戻ることを明らかにした綿密な考察である。氏にはほかに「仮定表現形式としてのタラバとタナラバ――キリシタン資料・狂言台本を中心に――」（『新大国語』5、昭54・3）がある。この中での指摘にあるように虎明本（タラバ294、タナラバ0）と虎寛本（タラバ30、タナラバ358）における「たらば」と「たならば」の正反対の分布状況は実際の話し言葉の変化の反映とは考えにくく、虎寛本の意識的使用の可能性が強いと考えられるし、これは天草版「平家物語」の使用理由にもあてはまる。ともかく江戸時代における両形式（タラバ、タナラバ）の実態の究明が望まれる。

山西正子「連体形『タル』のあらわれかた――『中華若木詩抄』のばあいを出発点に――」（『中田論集』、昭54・2）はやや考究の突っこみが不足している印象をうける。まず同種の資料間（抄物に限るなど）での連体修飾の場合というような限定が必要であると思われる。山口雄輔「物語を止める助動詞としての『けり』『ぬ』他――天草版と仮名草子本伊曽保物語との比較を中心に――」（『田辺論叢』、昭54・8）は「伊曽保物語」を天草版、国字本で内容が共通する二六編の結尾終止がどのような形式でどのように対応しているかを調査したもの。国字本について「……話の真実性を強調し確認させる役割は、『けり』と語調の調和する『ぬ』で果すように仕向けたのである。」（所収論

叢646頁）とするが、「けり」と「ぬ」の語調が調和するというのはいったいどういうことなのか、説明がほしいところである。村上昭子「助動詞ラウ――中世末期の用法――」（『中田論集』、昭54・2）は「らう」が係助詞の結びとして用いられることにおいて存続し、その理由を「らう」のもつ意味（明確な推量を表わす）にあるとする。ロドリゲス（日本大文典）の記述から一七世紀初頭では既に「らう」は中央（京都地方）では滅びて九州などの地方でだけ用いられた可能性が考えられるから、抄物に見られるのも用法が限られているだけに一般的でなく古めかしい言葉と意識されたのではなかろうか。島正三「日本古農書における『べし』系の用語」（『田辺論叢』、昭54・8）は「農業全書」「百姓伝記」など農書に多出する「べし」を扱ったもの。軌範が求められる書の必然性としてその多出は当然のことであり、作法、伝授の書などとともに「べし」止めはこれらのスタイルを特徴づける。用例のあげ方や整理は一考を要するし、「当てべし」などの接続のしかたについては既に橋本四郎「ベシ・マジの接続面の混乱」（『国語学』22、昭30・9）、福田良輔「方言と古文書」（『方言研究のすべて』所収、至文堂、昭44・9）などの研究があり、参考にすべきである。

樋渡登「『古今集遠鏡』俗言解小考――指定辞『ぢゃ』の活用語承接をめぐって」（『田辺論叢』、昭54・8）は指定の助動詞「ぢゃ」が準体助詞「の」を介さないで直接活用語に接続する用法（連体形準体法）が「古今集遠鏡」に多く見られることを指摘し、その理由を「漢籍などの講述的な文体として『活用語終止連体形＋ぢゃ』形式をむしろ恣意的に選んだのではなかったかと思われる」（所収論叢555頁）とする。これは、恣意的に選んだのではなく、連体形準体法、準体助詞「の」のいずれも口語であって両者は截然たる違いを示す以前の状態の反映ではないかと思われる。原口裕「連体形準体法の実態――近世後期資料の場合――」（『春日論叢』、昭53・11）も連体形準体法と準体助詞の「の」を介する用法の消長について、使用頻度、格表示機能の強弱などの点から分析を加え、準体助詞「の」が発達をとげ、逆に連体形準体法が衰微するのは天保期以降にあることを明快に論じた考察である。

坂梨隆三「『だのに』『なのに』をめぐって」（『国語と国文学』、昭54・9）は形容動詞や断定の助動詞が「のに」に接続する場合、江戸時代では「だのに」を用いていたのが明治期以降「なのに」が優勢になる推移の過程を豊富な事例で考察したもの。「だのに」の「だ」の活用形を終止形とする立場をとっている。これに対して相馬裕次「断定の助動詞『だ』の連体形について」（『成蹊国文』12、昭53・12）は連体形「だ」の用法を積極的に広く認め、これを連体形とする。そして断定の助動詞を「だ」と「な」に分立させ、「な」の終止形にも「な」の形を、「だ」の連体形にも「だ」の形を認めようとする（吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』〈明治書院、昭46〉も分立させる）。「上だ事」（大淵和尚再吟）のような用い方が発達をとげないうちに「な」が支配的な力を得、一方終止用法では「だ」が専用されるにいたるという機能の分化が促進し定着する過程の形が現代語にも見られる（残っている）のであって、対等の資格に立ちうるものではないことはやはり留意しなければならない。

宮地幸一「助動詞『さうだ』考――滑稽本詞章の考察――」（『田辺論叢』、昭54・8）は八種の滑稽本について様態を表わす「さうだ」と推定・伝聞を表わす「さうだ」について活用形別に調査したも

の。道本武彦「江戸後期町人階層の日常書簡文中に見える助動詞」（『田辺論叢』、昭54・8）は「永福用文章」（十返舎一九撰）、「世俗通用一筆啓上」（式亭三馬撰）を資料として書簡文に現われる助動詞を扱ったもの。江戸時代の文章・文語の実態を明らかにするためにもこのような研究はもっと進められるべきである。

五

次に助詞の研究についてのべることにする。山内洋一郎「主格の『の』『が』と古典の理解」（『国文研究と教育〈奈良教育大学〉』2、昭53・8）は「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」のように主格を示す「の」のあと直ちに終止形の述語をとる文型は破格ではあるが、これは主格の明示によって論理性をきわだたせたい近代語の一面をものがたるとする。このような「の」の用法は韻文の形式的制約から生じたものでなく、中世から散文に見られ、近世文語においてもめずらしくない。口語では主語を示すときは「が」を用いるのが普通であるから「の―終止形」は文語の徴憑とも考えられる。文語においても時代的差異が認められるから軌範にてらして破格とだけ処理するのではなく、いわば破格の論理をさぐり、ひいては文語の体系的研究は進捗させなければならない。実際に古文の解釈にあたっても文語の変化に注意を払うとともに口語での主格助詞「の」「が」の用法とも関連させて見てゆかねばならないのである。鈴木も「読本から見た馬琴の文語と文体」（『国語と国文学』、昭53・11）でこの「の」の用法に触れている。

黒瀬崇「井原西鶴の場合――格助詞『を』を中心に――」（『田辺論叢』、昭54・8）は西鶴の作品に見られる格助詞「を」を扱ったもの。全体にわたろうとするあまりややまとまりに欠けるうらみがある。『を』の近世における流行はその（漢文訓読―筆者補う）賜物であったのではあるまいか」（所収論叢216頁）というのも漠としており、さらに広く近世全体を見渡さなければ早計であろう。信太知子「『をば』小考――消滅過程の検討――」（『中田論集』、昭54・2）は「恩をば忘れず」のような「をば」が衰退する過程を考察したもの。衰退する理由が今後の課題である。鶴岡昭夫「近代口語文章における『へ』と『に』の地域差――『行く』と『来る』について――」（『中田論集』、昭54・2）は方向・目的・帰着点を表わす語に助詞「に」「へ」のいずれがどのように付いて「行く」「来る」と応ずるのかを江戸時代から現代にわたって地域性を勘案して調査したものである。彦坂佳宣「近世尾張方言の原因・理由表現――地方言語としての性格にふれて――」（『文芸研究』89、昭53・9）は近世後期の尾張方言で原因・理由を表わすのに「で」「に」を一般に用い、同時代の上方語、江戸語にくらべて古い面を残していること、語形が多彩でないことなどを明らかにしている。

接続助詞「し」の成立に関しては①菅範夫「中止法的に用いられる助詞『し』について」（『国文学攷』78、昭53・4）、②柏原司郎「接続助詞『し』の成立をめぐって」（『田辺論叢』、昭54・8）がある。従来「し」の成立についてはかならずしも明確であったわけではないが、どちらもサ変動詞「す」の連用形「し」に起源をもとめようとする。①は連用形に付く「し」を中心にして考察しているが、終止形につく「し」との関係（同一語か）についてどう考えたらよいのか、単純接続と並列という用法との違いの関連も問題になろう。②はさらに形容詞の「しし」語尾とのかかわりをも見ようと

している。

福島邦道「否定の『ばや』再考」(『実践国文学』16、昭54・10)は否定を表わす「ばや」と願望を表わす「ばや」が中世・近世を通じてどのように用いられているかを見、同音衝突の結果、願望の「ばや」が否定の「ばや」を圧倒したとする詳論。否定の「ばや」は氏の言うように「あらばや」の形で用いられ、願望の「ばや」にくらべて固定的である。すると願望の「ばや」と否定の「ばや」とは成立に違いが見られ、否定の方は条件表現としての「あらば」に「や」の付いたのが最初の用法であったかと思われる。否定の方は近世では新井白石の「折たく柴の記」にも「まれ人をとゞめまいらすとも、まいらすべき物もあらばや」(上、日本古典文学大系173頁)とある。なお氏は文語と口語との関係を追求する重要性を認めながらも国語史としての文語史なるものの存立には批判的である。

六

文章・文体についてはまず小林千草氏の一連の論考が目を引く。①「天草版『金句集』の『心』におけるゾ終止文の性格――『抄物』におけるゾ終止文との比較から――」(『国語学』114、昭53・9)は、天草版「金句集」の「心」(本則の注釈にあたる)に見られるゾ終止文(終助詞「ぞ」で閉じる文)の性格を抄物のゾ終止文と比較し、抄物の「ぞ」は注釈部分の文末をしめくくる文末指定辞のはたらきを果しているのに対し、「心」の方は本則の注釈であることをあらわにせず、口語的な置換えを図ったと判断でき、それは自分の言い分をつよく相手に告げるべくはたらきかけるもちかけの気持をつよく表わす教訓書の終止法と通ずることを明らかにする。周到な作業原則を設けたうえでの意欲的な考察である。また②「天草版『金句集』の『心』と『抄物』――注釈(訳出)方法の相違をめぐって――」(『中田論集』、昭54・2)は「金句集」の「心」と、「金句集」の本則・原文を共有する抄物の注釈部分とを比較して両者における注釈方法の違いを指摘する。注釈方法を、本則を直訳する型と意訳する型に大きく分け、さらに変種・混合の型を合わせて全体を五種類に分け、両者(心と抄物)の比較の結果、「心」の方が教訓的意図を訳文に反映させる傾向がつよいこと、逐語訳が徹底しており、その際本則とは訳出語の上で文語・口語の対応関係が認められることなどを明らかにしている。①とは別の視点からの考察であるが、着眼点のたしかさと考究の深化がうかがわれる論考である。なお①②と関連するものとして氏にはほかに「ハビアン著『妙貞問答』に関する一考察――依拠・関連資料をめぐって」(『国語国文』、昭53・5)もある。妙摩光代「『中華若木詩抄』に見る文末の『也』と『ゾ』」(『田辺論叢』、昭54・8)は細部にわたる分析をほどこしているが、論考の後半のテーマである系統を異にする抄物間の違いや抄物の自立的性格の存否については言が削がれているようだが、どのような結論になるのだろうか。柏原卓「天草本平家物語の文章小考」(『春日論叢』、昭53・11)は天草版「平家物語」の本文の中心をなす物語の部分の文末表現を分析し、地の文における助動詞「た」の役割の重要性、この「た」に導かれる伝聞形式の多出、地の文の丁寧表現のはたらきなどの特徴に言及んでいる手堅い論考である。

中村幸彦「擬古文論」(『春日論叢』、昭53・11)は、近世人、とりわけ国学者の間に生まれ、明治期に至るまで行なわれた擬古文の性格をそれを支えるこの文体に対する意識とのつながりで見ようと

したもので、擬古文は「人工的修辞的な遊戯の文章」とする。この文体も一つの型をなすが、含む範囲を通説より広くとる。当時の人々が擬古を営む背景を考えなければならないが、人工的な文章の正体もまず言語的分析をほどこしたのちに論じられることになる。馬琴については③服部仁「曲亭馬琴、その文体の確立――初期の戯曲性より――」（『国語と国文学』、昭53・11）、④鈴木丹士郎「読本から見た馬琴の文語と文体」（『国語と国文学』、昭53・11）などがある。③は馬琴の文学理念、文章観から雅言、漢語（白話）、俚言を混じた七五調の文体であるとの指摘。実は混じえ方の様相が問題なのであり、この点について筆者は④では次のように考えてみた。馬琴にあっては本来の和と漢という語源的な要素を軸に、雅と俗と漢という別種の価値要素がからみ合っており、俗は基軸の和漢にまたがり、俗に結びつく和は雅語からは遠く中世近世の口語と関連し、俗と結びつく漢は白話語とつながるように思われるのである。④は従来の指摘の上に立って近世文語全般と馬琴のそれに対する距離を眺めたもの。後半部の語彙的事象の「～やか」形容動詞については「馬琴の読本に見られる～ヤカ形容動詞の性格」（『国語学研究』19、昭54・12）が補いの小稿である。

明治時代の文語の研究も作家の文体や表現意図と関連づけて考察したものが多く見られる。最初から古典語という軌範に基づいて文語・文体を測るのでなく実態の分析ののちに伝統的なものとの類似性と差異性、表現価値が問題にされねばならない。形を同じくする語形の質の面である用法や意味の変容を考え、また一方ではある語形の使用の多寡や淘汰という量的な面も考慮すべきなのである。特に岡本勲氏の継続的な研究が注目される。「北村透谷の詩と論文――文体のゆれについて――」（『論集日本文学・日本語4　近世近代』、角川書店、昭53・7）は透谷の作品の表現内容と助動詞の用法との対応関係を調査し、文学的文章と論述的文章とで差が見られ、後者は明治普通文の性格に通ずることなどを指摘する。氏にはほかに「医師としての鷗外と作家としての鷗外――文体の比較から」（『国語国文』、昭53・3）がある。また木坂基「近代文語としての一葉のことば――指定的表現と時間的表現とをめぐって――」（『国文学攷』78、昭53・4）は「たけくらべ」を中心に指定的表現に与る「べし」「なり」「ぞかし」などと時間表現に与る「ぬ」「つ」「き」「けり」などの二つの尺度から樋口一葉の文章の雅俗折衷体としての性格を明らかにし、さらに「たけくらべ」は指定表現語群から見ると内部構造において大きく二つに分けられることなどに及んでいる。ただ「さりとは」は指定表現に関与する語ではなかろう。氏にはほかに「明治文語としての『たけくらべ』のことば㈠――題名の性格と意義について」（『解釈』、昭53・7）がある。

＊　＊　＊　＊　＊

以上あらあら見てきたが、気付いたことを一、二あげたい。まず抄物を対象とした研究がますます盛んになってきていることがわかる。これは文法の分野に限ったことでない。またいわゆる関西系抄物に加えて東国系統の洞門抄物の研究も一段と進められてきており、資料の発掘とその複製・翻刻等による公刊が行なわれつつある現状から併せて今後一層研究の進展することが期待される。このこと自体は喜ばしいことであるが、研究が微細にわたる傾向もままあ

るように感じられる。研究の細分化を否定するものではもちろんないが、問題意識の欠落した現象面の事実の羅列であってはいけないわけであり、その回避のため他との関連を重視して総合的な見地から言語事実を凝視することが必要になってくる。このことは問題解明の目的意識がはっきりしたものでなければならないことに通ずる。

口語を文語と関連させて考察した論考も目についた。また文語そのものの研究も少くないが、この方は方法論の確立が課題となるように思われる。

——専修大学教授——